

研究論文

『推理式指導読方』（戸田城外著）に基づく 説明的文章教材の分析手法の探索

創価大学教職大学院 教職研究科教職専攻
土居 正 博 荒 井 英 樹

要 約

『推理式指導読方』（戸田城外著）は中学受験用の参考書である。川島は、文学的文章教材「吉野山」の『推理式指導読方』における解説を分析し、「参考書としての秀逸さ」を「項目相互の関連性」などを解明することによって明らかにした。本研究は、川島が明らかにしたように、戸田が「語」を重要視していること、文章理解のために「必要か、必要でないか」との基準によって判断していたということの二点を手がかりとし、『推理式指導読方』における戸田の説明的文章教材の分析手法を探索した。我々はその教材の分析手法を、授業を行う際の教材研究に生かすため、読解を「書くこと」につなげるという戸田の国語教育観と「問題」に着目して分析を進めた。その結果、戸田の本文構造上重要な箇所から「語」に関する項目及び「問題」を抽出していたことが明らかになり、万遍なく解説するのではなく、「軽重をつけて」解説していることが分かった。また、特に「記憶問題」には、「書くこと」につなげるための配列の工夫がされていることが分かり、「書くこと」を読解指導の最終目標に置くという戸田の国語教育観が見て取れる結果となった。

1 『推理式指導読方』及び先行研究について

1-1 『推理式指導読方』の概要

『推理式指導読方』（以下『指導読方』と記す）は、戸田城外の著した教科書準拠版の国語参考書であり、主に受験準備学習用に用いられた。『指導読方』自体は戸田の単著である。しかし、戸田の単著になる前、1933（昭和8）年、山田高正との共著で『推理式指導読方指導』が日本小学館から発行されている。この『推理式指導読方指導』が『指導読方』の先駆けとなっている。そして1938（昭和13）年、『推理式指

キーワード：推理式指導読方，国語科教育，説明的文章教材

『指導読方』の改版1版として戸田城外著『推理式指導読方』（本論文ではこちらを『指導読方』と記している）が発行された。この『推理式指導読方』及び『指導読方』は初版から数えて6年後の1939（昭和14年）2月までに「改版24版」を重ね、当時のベストセラーとなった¹⁾。

扱っている学年は尋常小学校第5学年及び第6学年の前期・後期であり、全部で4種類の『指導読方』が存在していたことになる。そして、それぞれの学年の教科書教材一つ一つにつき、「単語の解釈・文章の解釈・文段の研究・語法・類語・反対語」などの項目を設け、詳細に解説をしている。以下の表は各項目と内容をまとめたものである。

表1 各項目内容一覧

項目名	内 容
新しい字	新出漢字を取り上げている。
読みかへ字	本文中の漢字で、読み方に注意すべきものを取り上げている。
単語の解釈	本文中の単語の意味を解説している。
文章の解釈	本文中の文章で、意味の分りにくいところを解説している。
文段の研究	文段（段落） ²⁾ を一言でまとめている。
語法	本文中の単語を取り上げ、さまざまな用法を紹介している。
形式探求（類語・反対語）	本文中の単語を取り上げ、その語の類義語または反対語を紹介している。
鑑賞	主に文学的文章について、戸田がその作品を評価している。
挿絵の説明	本文に使われている挿絵について説明している。
参考文	本文に関連する、「歴史」「地理」「人物」「宗教」などの事項について詳細に解説している。
内容推理問題	本文の内容に関する問題。
記憶問題	本文に出てきた漢字や単語などの問題。

1-2 「序」と「自序」及び各項の戸田の説明から見る『指導読方』を貫く国語教育観

『指導読方』巻頭には、戸田の師であり、『創価教育学体系』を著した牧口常三郎が「序」を寄せている。そこには、『指導読方』全体を貫く国語教育観が表れている。まず牧口は、「読むこと」において、「文章の組み立て」を理解することや「書くこと」に応用することを重視し、次のように述べる。

読方の稽古は造作もないように見えてその実はなかなかむずかしいものであります。単に文字や、語句や文章などの解釈に留まってよいならば何でもありませんが、文章の組み立てを理解し、それを以て綴り方に応用するのでなければ、本当に解ったとは言われないからであります。

読方の稽古には、もう一度見直して更に文章の組み立てを研究することを怠って

はなりません³。

これらの「文章の組み立て」や「綴り方に応用」という考えこそ、『指導読方』を貫く国語教育観である。戸田自身、この二点に関して次のように「自序」や「文段の研究について」にて述べている。

文章組み立て上の理解と文章観の確立に力をそそぎ、その文段研究に一新生命を開拓した⁴。

我々はこの模範文を基礎とし、之に類似した作文は自由に書けるところまで進まねばならない。国語研究の最大の目的は応用段階において自由に作文が書き得られる所にある。それゆえ、我々は国語を学ぶ際に、最もよくこの文段の研究に注意し、どんな文章を見ても、すみやかに全文の意味を知り、同時にそれを理解できるように、日ごろから練習しておかなければならない⁵。

このように、牧口及び『指導読方』の著者である戸田は「読み方指導」において「文章の組み立て」を重視し、また「綴り方」に応用することを目指していたのである。この「綴り方」つまり「書くこと」に関する力は、昨今、その低下が指摘されている。「筋道を立てて考えを書けない。」「情報を読み取って論理的に書くことに難がある。」⁶などと新聞の一面でも叫ばれている。この「書く力」は、「読む力」と別々に独立して伸びるわけではなく、読んで書くこと、書いて読むことを通して併せて伸びるものと考えられるようになってきている⁷。その点、「読み方指導」でありながら「書く力」を伸ばすことを目的としていた『指導読方』は先進性があったといえる。本研究では、これらを踏まえ、戸田がこのような教育観を持ったうえでどのように教材を分析し、『指導読方』を執筆したかを探っていく。

1-3 先行研究について

1-3-1 先行研究の概要について

『指導読方』を扱った先行研究としては川島による二本の論文が存在する。「戸田城外著『推理式指導読方』解析」⁸と「解析論考戸田城外著『推理式指導読方』」⁹である。

「戸田城外著『推理式指導読方』解析」では、第6学年の教材「吉野山」の『指導読方』の解説を分析している。川島によれば、『指導読方』の「項目秩序の体系性」、「解説の徹底した合理的明快さ」、「本文と項目相互の関連性」は大学受験参考書以上に秀逸している、と述べている。そして「解説の合理的明快さ」と「本文と項目相互の関連性」について検証している。具体的には「吉野山」を三つのテーマ、すなわち「桜の眺望」「歴史的眺望」「歴史事項」に分けて、本文の構造を見出している。そしてその構造から、「語法」や「形式探求」などといった項目との関連性を見出していっ

た。そして「語法」及び「形式探求」は本文の重要な箇所集中していると指摘している。文章理解や書くことにおいて「語」は欠かせない要素だと戸田は考えていたと、川島は述べる。すなわち川島は、この研究を通して、「戸田の思考や教材の見方」を、『指導読方』と本文を照合することで推測しているのである。本研究においても同様に、戸田の思考を再構成する手法を取り入れている。

また、「解析論考戸田城外著『推理式指導読み方』」では、項目を一つ一つ数的・質的に分析していくことにより、「項目秩序の体系性」を論じている。川島によれば、『指導読方』の項目秩序は一次元から二次元へ、二次元から多次元へと整然と発展している、と述べている。そして特に「単語の解釈」「形式探求（類義語・対義語）」「語法」という、「語」を扱った項目の要素が秀でており、扱っている量も多い、と結論づけている。

これら川島の研究の主な目的は、『指導読方』そのものの解析であった。『指導読方』の解説の合理性や、本文と項目とが関連付けられていること、語彙の扱っている数の多さなどを、証明している。要するに、「参考書として」いかに秀逸なものであり、先進性があったかを論じているのである。川島研究の結論としては、『指導読方』においてすべての項目に貫かれる解説の方法は、文章理解と作文法において何が、「必要か、必要でないか」の二進法である、ということである。つまり、この語を解説する「必要があるか、ないか」、この文章を解説する「必要があるか、ないか」ということや、子どもがこの段落を理解する「必要があるか、ないか」という判断をしていたということである。

川島の研究は、文学的文章において、主に「語」を扱った項目と本文との相互関連を立証しているものである。説明的文章においてそれが成り立つことは立証されていない。また、「語」以外の項目、特に「問題」と本文との相互関連についても触れていない。

1-3-2 国語科教育の観点から見る「必要か、必要でないか」という判断の先進性について

川島研究の結論である、戸田が「必要か、必要でないか」という判断をして解説をしていたということは、国語参考書として「驚異」¹⁰なだけでなく、国語科教育という観点から見て非常に先進性があることである。たとえば、平成19年全国学力テストの「活用(B)」問題を見てみる。そのB問題の中に「芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の第三場面は必要か、必要ないか」という問題がある。長崎は、自身の授業の受講生である大学生に全国学力テストに取り組みせるとともにアンケートを取り、「どんな問題に興味を持ったか」を探った¹¹。すると、六割を超える学生が、この問題を挙げたのである。長崎は、このアンケート結果の原因を「(学生が) これまでにこのような問題に遭遇してこなかったから」¹²としている。平成19年時点の大学生が、「新鮮だ」と感じる問題だったということは、このような問いが現在ですら国語科教育の最先端の

問題と言えるだろう。そもそも、このように「必要か、必要でないか」と問われることでどんな力が伸びるか。長崎は「テキストを利用、活用して自らの意見を『論ずる』力」であるとしている¹³。これまでの国語科教育では、このような力を伸ばすことはあまり成されてこなかった。しかし、PISA 型読解力の概念が普及するとともに、このような力を伸ばすことが叫ばれるようになってきたのが現代の国語科教育であるといえる。阿部もこのことに関して次のように述べている。

今までの国語科教育では、教材としての文章は絶対であるという前提で指導がおこなわれてきた。(中略) だから、文章の内容や論理をただ「理解」させるだけという指導がほとんどであった。当然、子どもたちに文章を吟味(評価・批判)させていく指導はほとんどおこなわれてこなかった。しかし、文章を吟味(評価・批判)する力をもててこそ、子どもたちは主体的な読み手として育っていける¹⁴。

阿部も長崎と同様、文章を評価する力を伸ばすことがこれからの国語科教育の課題であるとしているのである。

もちろん川島が明らかにした、戸田が「必要か、必要でないか」という判断をしていたということは、厳密には上記の全国学力テストの問題とは異なる。前者は「参考書執筆者の頭の中の判断」であり、後者は「子どもの判断」である。しかし、現代の国語科教育が、学習者にこのような判断をさせ、それに伴って自らの意見を表現させる力を伸ばそうとしていることを鑑みると、「必要か、必要でないか」という判断は授業を行う教師の頭の中にも存在すべきである。それは、本文の中のこの単語を説明する「必要があるか、ないか」ということや、本文のこの箇所を説明する「必要があるか、ないか」、本文全体を理解するうえでこの箇所は「必要か、必要でないか」などの判断である。それが出来てはじめて、全国学力テストで求められるような発問を作ることができ、それを駆使して、「テキストを利用、活用して自らの意見を『論ずる』力」を伸ばしていける、と考える。先に挙げた『蜘蛛の糸』は文学作品であったが、長崎は今回我々が取り上げる説明的文章の指導においても、「この段落は『必要か、必要でないか』」という趣旨の発問を行い、学習者の思考の活発化を促している¹⁵。長崎がこのような発問をするのに至ったのは、「教材研究」の段階で長崎自身が「この段落は『必要か、必要でないか』」ということ考えたからであろう。実際には戸田は『指導読方』において子どもに「この段落は『必要か、必要でないか』」などということは問うてはいない。しかし、川島がいうように戸田が教材を分析する段階で「必要か、必要でないか」ということを考えていたとしたら、それは現代でようやく一般に広がりつつある国語科教育の問題意識であり、非常に先進性が高いと考える。今から70年以上前のまさに「偉業」である。

2 本研究の対象と目的

2-1 本研究の対象

本研究で分析の対象としたのは1938年改版25版の『推理式指導読方』¹⁶である。また、分析する教材は、国定教科書の「飛行機の発明」¹⁷と「国語の力」¹⁸という、現在でいえば説明的文章に属するものにした。この本文と『指導読方』のそれぞれの解説を照合し、戸田の教材の分析手法を探っていく。これが主な研究方法である。

また、それに加えて現代の教科書ガイドとの比較も行う。比較するにあたって、なるべく上記二つの教材と類似する教材の解説を準備する必要がある、様々検討した結果、小学校第4学年の教材「アーチ橋の進歩」¹⁹を選んだ。その解説を『指導読方』の解説と比較することも試みた。

2-2 本研究の目的

1-3で述べたように、川島の研究が「『指導読方』の参考書としての秀逸さ」を検証することを目的としていた。それに対して本研究の目的は、「戸田による教材の分析手法を探ること」²⁰である。我々は、来春から小学校現場に出て、教師として授業を行う教職大学院生である。戸田の教材の分析手法を研究し、それを実際の授業を行うための教材研究に生かすことまでを視野に入れている。1-3-2で述べたように、教材研究の段階でも重要となる、「必要か、必要でないか」という判断が、戸田によってなされていたことを実証していく。また、教材の分析手法を探る中で、川島の研究において、文学的文章で「本文」と「語法」などの「語」に関連する項目との相互関連性が立証されたことを踏まえ、それが説明的文章でも立証されるのかを探ること、また『指導読方』には「問題」の項目もあり、「問題」を考えることは教師としての教材研究の際に非常に重要になってくる。そこで我々は「問題」にも着目し、「問題」と本文との関連性を探ることを本研究の目的とした。

以上をまとめると、本研究の目的は次の二点である。

- ① 戸田による「必要か、必要でないか」という判断がなされていたという川島の研究結果を、より確実なものにすること。
- ② 戸田による説明的文章教材の分析手法を探索し、「語」及び「問題」と本文との関連性を探ること。

3 『指導読方』における「飛行機の発明」（小学国語読本5年前期）の解説の分析

3-1 「語」と文章構成の関係からの分析

3-1-1 「語法」と「形式探求」に注目する理由—『推理式指導算術』との比較から—

「飛行機の発明」(本文は資料1参照)という説明的文章がどのように戸田によって分析されていたかを分析していく。川島の研究で、「語」に関する項目が秀でている、ということが明らかになっていた。それは、「扱う数の多さ」に加え、「本文の重要な箇所に集中している」という点である(1-3-1参照)。この点を踏まえて、「語法」「形式探求(類語および反対語)」に着目した。分析結果を示すまえに、なぜ川島同様に我々も「語法」と「形式探求」に着目したかについて述べる。

「語法」は、表1に示したように、「本文中の単語の用法を示したもの」である。たとえば「飛行機の発明」の本文中の「こらす」という単語について、「1. 工夫をこらした。……あれこれと考へをねる。2. 思をこらす。……一つのこと心に心をかたむける。3. あの子は、うそをついたから、一度こらしてやろう。……こりて再び、しないやうにする。いましめる。」などと用法を挙げた後、その意味を説明している。この1から3のうち、必ず1は本文での用法が挙げられ、2以降はそれ以外の用法が挙げられている。「こらす」以外の単語も同様に解説されている。

また「形式探求」は、表1に示したように「本文中の単語の類義語や反対語を紹介したもの」である。たとえば「飛行機の発明」の本文中の「研究」という単語について、「考究」という類義語が挙げられ、「自由」という単語について「不自由」という反対語が挙げられている。

この二つの項目には、子どもが、ほかの用法や単語と「比較」しながら単語の使い方や意味を身につけることができるという共通性があると考えられる。この「比較」させるという考えは、『推理式指導算術』にも通ずる戸田の考えだと我々は考える。駒野は『推理式指導算術』を分析し、「子どもたちに算術教授の根幹である『推理力』を身に付けさせること、これが同書の目的となっている。そのための方法は、問題の『同等性』と『差別性』を見出させる練習にある」²¹と述べている。この「同等性」と「差別性」を見出させるということは、簡単に言えば「比較」をさせることである。『指導算術』では「基本原形」という基礎問題のようなものと、その形を少し変えた「変化問題」を比較させることによって、「同等性」と「差別性」を見出させようとしている²²。この「比較」しながら学ぶということが、『指導読方』においては、「語法」や「形式探求」において、本文での単語の使われ方と異なる用法を「比較」したり、反対語や類義語と「比較」したりすることでも考えられる。また、「語」に関する項目は「語法」と「形式探求」以外に「単語の解釈」という項目がある。しかし、「単語の解釈」は、たとえば「発明」に関して、「人のまだ知らないものをかんがへ出して造ること。」といったような、単に説明をするだけの解説である。そのため、「語法」や「形式探求」と違い、子どもたちは「比較」しにくいのである。我々は、このように考え、「語法」と「形式探求」は、「単語の解釈」よりも戸田が重要視しており、「比較」させながら文章理解や作文につなげていくための、重要項目だと捉えている²³。以上の考察の結果、「語法」及び「形式探求」に着目することとした。

3-1-2 「語」と文段の関係について

「飛行機の発明」から取り上げられている「語法」は「こらす・あやつる・あふる・近く・得意・果し・見合はせ・上る・調子・収め・非常」である。「形式探求」は、類語が「研究・意外・以来・熱中・改良・一思ひに・発明・記事・記録・もちろん・理くつ・実際・苦心・適当・破損・修繕・経た・大洋・輸送・技術・進歩」で、反対語が「自由・熱心・模型・失敗・理くつ・破損・地上・同様・進歩・実物・実際・成功」である。（資料1参照）そして、各文段の「語法」「形式探求」の数を集計した。その結果は以下の表に示す。なお、「語法」や「形式探求」が複数回本文に出てきている場合、その都度数えたので、表の合計数は、「語法」や「形式探求」合計数と一致しない。

表2 語と文段の関係

段	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
語法	2	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	4	1
類語	1	6	1	1	1	0	0	1	3	0	4	1	0	1	1	0	0	0	0	9
反対語	0	1	1	1	1	5	0	2	3	0	1	0	0	3	0	0	0	3	0	4

この分析でわかるのは、①「語法」の数はあまり偏っていないこと、②「形式探求」の偏りから、第二十段は戸田が重要だと考えているだろう、ということの二点である。実際、第二十段は、「まとめ」にあたる部分で、総括的なことや筆者の意見のようなものが述べられているので、重要なことは明らかである。しかし、それ以外に、顕著な偏りは第二段や第六段にしか見られなく、その内容を見ても、二十段と違い、文段全体が重要とは思えない内容であった。そのため、「文段」という括りよりももう少し細かい括りで分析してみることにした。

3-1-3 「語」とテーマの関係について

そこで、本文を（資料1）のように、三つのテーマごとに分けた。テーマは「実験・研究の結果・成果」「実験・研究の方法・過程」「人物に関する記述」である。

「実験・研究の結果・成果」は、岡山の幸吉やリリエンタールなどの人物の「実験や研究」の「最終的な結果や成果」に関する記述のこととした。たとえば、「とうとう小さい蒸気機関を作って取付けることに成功しました。」などといった記述である。「飛行機の発明」は文字通り、飛行機がいかに発明家たちによって、研究が失敗したり成功したりしながら、発明されてきたのか、その経緯を辿っている。そのため、当然この「実験・研究の結果・成果」というのは内容的にも重要なことで、具体的にその発明家が何をしたのか、ということの説明している部分である。我々は、この「実験・研究の結果・成果」はもっとも戸田に重要視され、「語法」や「形式探求」は多いのではないかという仮説を立てた。

「実験・研究の方法・過程」は、実験や研究に関する記述の中で、上記の「結果や成果」を除いた、「実験方法」や「実験経過」に関する記述である。具体的には「それ以来、彼はますます研究を重ね、滑走機を改良して、其の操縦に熱中しましたが」といった記述である。これは、「最終的な結果や成果」を表しておらず、「飛行機の発明」の歴史を知るといふ本文の主旨からすれば、戸田は「あまり重要ではない」という判断を下しているのではないかと我々は仮説を立てた。

「人物に関する記述」は、「実験や研究」に関する記述ではなく、「人物の特徴」などを述べている記述である。具体的には、「同じ頃、アメリカにラングレーといふ人がいました。」といった記述である。これも、本文の主旨からするとあまり重要ではないのではないかと、という仮説を立てた。

そのようにテーマ分けしたものが(資料1)である。本文を資料のように分け、それぞれのテーマごとに「語法」及び「形式探求」の数を集計した。その結果が表3である。

表3 各テーマと「語法」及び「形式探求」の関係

テーマ	語法	形式探求	全文字数
実験・研究の結果・成果	8	25	888
実験・研究の方法・過程	2	13	741
人物に関する記述	1	6	288

すると、「実験・研究の結果・成果」が他のテーマよりも「語法」、「形式探求」ともに多く、「語法」に至っては、「実験・研究の方法・過程」の4倍、「人物に関する記述」の8倍の数であった。そもそも「飛行機の発明」という文章は、「実験(研究)」→「結果(成果)」→「実験(研究)」→「結果(成果)」→……という流れで書かれており、最後の二十段以外にはあまり筆者の考えやまとめなどは入っていない。つまり、この文章は「飛行機の発明」の歴史の「流れ」を、文章「全体」を読むことで把握することができる文章であるといえる。そのため、戸田は「段落」という区切りよりも「結果」や「過程」といったテーマという区切りで「必要か、必要でないか」を判断していたと思われる。そして、「実験・研究の結果・成果」というテーマが必要だと判断し、「実験・研究の方法・過程」や「人物に関する記述」はあまり必要でないと判断していると考えられる。現に、「実験・研究の結果・成果」というテーマに着目して読んでいくと、本文の全体の流れ、つまり「飛行機の発明の歴史の流れ」を読み取ることができるのである。ここから、戸田が文章を万遍なく、均一に扱っているのではなく、「必要なところ」を、「語」に関する解説を多くすることで「重く」扱っているということが分かる。「語法」の数も「形式探求」の数も、「結果・成果」に関する記述から多く抽出されている。つまり、戸田は文章を「必要か、必要でない

か」という判断をしながら「軽重をつけて」読み、『指導読方』でも「軽重をつけて」扱っているのである。

3-1-4 「語」とテーマの関係を踏まえた上での、「例外」の考察

それでは、なぜ「方法・過程」というテーマや「人物」というテーマからも「語」が抽出されているのだろうか。我々は特に「語法」が抽出されている「方法・過程」「人物」のテーマに属する記述を分析した。するとそれらは、「ライト兄弟に関する記述」であった。ライト兄弟に関する記述からは、多くの「形式探求」も抽出されていた。ライト兄弟は「飛行機の発明のまとめである第二十段にも出てくる、重要な人物である。そのライト兄弟に関する記述を戸田は「必要である」ととらえていたことが分かる。ライト兄弟の研究を扱った箇所では、「方法・過程」に属する箇所からも「語法」や「形式探求」が多く抽出されている（資料1参照）。たとえば、ライト兄弟が実験を「しばらく見合わせていました」という記述は、「語法」が抽出されているが、テーマとしては「方法・過程」に属している。しかし、リリエントールやラングレーに関しては、「方法・過程」の記述からは「語法」は抽出されていない。また同じくライト兄弟の「人物」に関する箇所からも「語法」や「形式探求」が抽出されているのである（資料1参照）。たとえば、第九段は、段全体が「人物に関する記述」というテーマに属しながらも、「語法」が1つ、「形式探求」が計6つ抽出されている（資料1と表2参照）。第九段が「人物に関する記述」であることに加え、非常に文量の少ない文段であることを鑑みると、例外的に非常に多くの「語法」や「形式探求」が抽出されていることがわかる²⁴。もちろん、リリエントールやラングレーの「人物に関する」記述からは「語法」や「形式探求」はほとんど取り出されていない。このように、ライト兄弟に関する記述を戸田は「必要である」と判断していたのである。

そして、特に「語法」に着目して、「語法」が抽出されている部分を取り出して、「文段の研究」での戸田による意味段落分けを加味して²⁵再構成してみると、（資料2）のようなすっきりとした構造が浮かび上がってきた。おそらく、この構造を立てることが戸田の最初の思考だったと考えられる。これは、文章全体の「軽重」を把握することである。そして、「重」の部分だけを抽出し、この文章構造を描き出したのである。この構造を描いた後、文章理解や書くことに重要な「語」に関する事項すなわち「語法」や「形式探求」を抽出していったのであろう。その抽出の仕方も、本文の構造上重要な箇所から抽出していき、「語法」や「形式探求」で取り上げ、語および文章全体の理解を深めようとしている。つまり、「文章構造（全体）と語（要素）」という二つを絡めて扱っているのである。そうすることで、文章理解および語彙の増進を促し、最終的には「書くこと」まで目指しているのである。これが『指導読方』の大きな特徴の一つである。以下に「語」と文章構造から見出した戸田による教材の分析の手順をまとめる。

戸田による教材の分析の際の思考の流れ

- ・本文全体の中で必要な部分（段落）だけを抽出した「文章構造」を描く。文章理解上、「必要か，必要でないか」を見極める。

↓

- ・抽出した必要な部分（段落）を理解することは，文章全体を理解するのに必要である。

↓

- ・抽出した部分（段落）を理解するには，「語」を理解していることが必要である。

↓

- ・抽出した部分（段落）をしっかりと理解させるために，「語」に関する説明，つまり「語法」や「形式探求」を多くし，「軽重をつけて」扱う。学習者に抽出した語の意味をしっかりと捉えさせると同時に，用法や類義語，反対語にまで知識理解を広げ，文章を書く力を伸ばす。

↓

- ・こうして「語法」や「形式探求」といった「語」に関する事項を「文章構造」上重要な箇所から抽出し，文章全体の理解を促す。文章全体の意味を捉えるとともに，「文章構造」上重要な箇所から抽出した「語」を身につけさせることによって，学習者にとって本当に生きた「語彙」を増やすことにつなげ，「書く力」を伸ばそうとした。

以上のように，戸田による教材の分析手法は推測できた。戸田は「必要か，必要でないか」ということを判断して，その判断に従って本文に「軽重をつけて」扱っているのではないか，という推測を立てた。

3-2 「問題」と文章構造からの分析

3-2-1 「問題」の概要について（『指導読方』の問題及び『教科書ガイド』の問題について）

前項では「語」と文章構造を照らし合わせて分析したが，本項では「問題」（「内容推理問題」及び「記憶問題」）と文章構造を照らし合わせて分析した。分析に入る前に『指導読方』にある「問題」について具体例を挙げながら，その概要を押さえておく。『指導読方』にある「問題」は「内容推理問題」と「記憶問題」の2種類があり，『指導読方』の項目の中では終盤に「内容推理問題」，「記憶問題」の順番で位置づけられている。「問題」に関して，「自序」には「問題の扱いは之を内容推理問題と，記憶問題に分ち，前者は児童の推理力養成を主とし，後者は純然たる形式的記憶力の涵養に重点を置いた」²⁶と記されている。「内容推理問題」「記憶問題」の2種類の問題には異なる趣旨があることが理解できる。このうち，「記憶問題」に関しては，3-3でさらに考察を加えた。

先に「内容推理問題」を示す。「飛行機の発明」で扱われている「内容推理問題」としては、以下のような「問題」がある。

一、「岡の上から一思ひに飛んでみると、意外にうまく空中を滑走することが出来ました。」とあるがこの人は初めからうまく飛べると思っていたか。それはどこでわかるか。
二、「それ以来、彼はますます研究を重ね、滑走機を改良して、その操縦に熱中しましたが。」この文で彼は何か力を得てますます研究したことが分る。何に力を得たか。

上を見れば分かるように、「文章の内容」に即した「問題」となっている。そのため、答えの根拠ももちろん文章の中にある。文章理解に関する問題である、と言える。しかし、単なる文字面の理解ではなく、文脈や語意をしっかりと理解していないと解けない問題になっている。

一、次の文章を解釈せよ。 1, それを體に着けて、岡の上から一思ひに飛んで見ると、意外にうまく空中を滑走することが出来ました。
二、I次の片仮名を漢字に直せ。 1, トぶ 2, ヘイグシ 3, ハト 4, ツバサ 5, オドロカす
三、次の言葉のわけを言へ。 1, 工夫をこらす 2, 研究 3, あやつる 4, 操縦 5, 熱中する

次に「飛行機の発明」で扱われている「記憶問題」を示す。例えば以下のような「問題」がある。

「飛行機の発明」の本文中の文や語句を使っているものの、文章内容に関する「問題」ではない。漢字を書けるように、言葉の意味を理解できるようにという「問題」になっている。

また、教科書ガイドとの比較も行った。そのため教科書ガイドの方の問題の概要にも触れておく。我々は、「飛行機の発明」の比較対象として、前述したように、同じ説明的文章であり、分量も同等である、「アーチ橋の進歩」を選出した。『教科書ガイド 小学国語 教育出版版 4年上下』²⁷（以下、『教科書ガイド』と記す）の「アーチ橋の進歩」の解説を扱った箇所を比較対象とした。『教科書ガイド』では「問題」が見開き2ページに渡って載っている。初めの見開き1ページを「テストにズバリ①」として、文章全体の前半が書かれており、残りのページを「テストにズバリ②」とし、後半の文章が載っている。要するに、「軽重」をつけず、均一に問題が設定されている。『教科書ガイド』は教科書に準拠しており、子どもが学校の授業の理解に生かされるよう内容に関する問題が11問載っている。例えば次のような問題である。

<p>1, 一線①「はば五センチメートルぐらい, 長さ四十センチメートルぐらいの板目紙」は何をたしかめるためのものですか。() にあてはまる言葉を文章中から書きぬきましよう。 ・() が () のにてきしていること。</p>
<p>2, 一線②「アーチの形」とどのような形の板目紙をくらべていますか。文章中から二字で書きぬきましよう。 □□な形</p>
<p>4, 一線④「同じような大きさや形をした台形の石」が使われたのはなぜでしょうか。最も合うものをえらんで, 記号を○でかこみましよう。 ア 橋をささえるのにもっともてきした材料だから。 イ たがいにしめつけ合い, 強い橋をつくるため。 ウ 木を使っていると, 同じ大きさのものがそろわないから。</p>

3-2-2 「問題」の数と種類の分析—『教科書ガイド』との比較を通して—

「飛行機の発明」の「問題」の数と種類についてまとめ, 「アーチ橋の進歩」の『教科書ガイド』との比較分析を行った。以下は『指導読方』の問題の数と種類を集計したものである。

【内容推理問題】…5問
【記憶問題】…全100問
・記憶問題1 ……文章解釈問題 6問
・記憶問題2-1 …漢字変換問題 24問
・記憶問題2-2 …漢字変換問題 2問
・記憶問題3 ……語句の意味問題 10問
・記憶問題4 ……読み仮名変換, 意味問題 10問
・記憶問題5-1 …熟語作成問題 8問
・記憶問題5-2 …熟語作成問題 5問
・記憶問題6 ……類語問題 7問
・記憶問題7 ……反対語問題 13問
・記憶問題8 ……短文作成問題 4問
・記憶問題9 ……漢字の正誤問題 4問
・記憶問題10 ……文章の正誤問題 2問
・記憶問題11 ……文章穴埋め問題 5問

次に, 『指導読方』の問題と『教科書ガイド』の問題を比較した表を示す。なお, 表では『指導読方』の「内容推理問題」と『教科書ガイド』の「内容に関する問題」を, 『指導読方』の「記憶問題」と『教科書ガイド』の「語句問題」をそれぞれ同等のものとして扱っている。

表4 『指導読方』と『教科書ガイド』の問題数の比較

	内容推理問題（内容に関する問題）	記憶問題（語句問題）
『指導読方』	5	100
『教科書ガイド』	11	0

表を見てもわかるように、『指導読方』は『教科書ガイド』と比べて問題数が圧倒的に多い。「内容推理問題」は全部で5問しかないが、「記憶問題」は11項目あり、全部で100問もある。そして、漢字問題から類語、反対語、さらには短文作成の問題まであり、多岐に渡っている。一方『教科書ガイド』には問題が11問しかなく、しかも11問すべて文章内容に関する問題である。『指導読方』が学習参考書であることを考慮にいれても問題数の多さと問題種類の多様さは特筆に値する。

『指導読方』における問題数の多さや問題種類の多さは「飛行機の発明」に限らず、どの教材でも見られ、『指導読方』の大きな特徴ともいえる。

3-2-3 「問題」と本文テーマとの関係の分析

「飛行機の発明」と「問題」を照らし合わせ、分析を行った。「語」に関する分析と同様、「問題」をその「問題」が抽出されている箇所のテーマごと（「実験・研究の結果・成果」、「実験・研究の経過・方法」、「人物に関する記述」ごと）に分類し、「語」の場合と同様に、テーマごとに問題の数を集計した。結果は以下の通りである。なお、表では「内容推理問題」を「推理」、「記憶問題」を「記憶」と表記する。また、「問題」が二つのテーマにまたがり重複する場合、そのどちらのテーマにも数

表5 テーマと問題の関係

	実験・研究の結果・成果	実験・研究の経過・方法	人物に関する記述
推理	1	3	1
記憶1	4	2	0
記憶2-1	16	14	7
記憶2-2	1	1	0
記憶3	5	8	1
記憶4	8	6	3
記憶5-1	14	12	1
記憶5-2	9	2	1
記憶6	9	3	0
記憶7	16	6	5
記憶8	0	2	2
記憶9	3	4	1
記憶10	0	1	1
記憶11	1	0	0
合計	87	64	23

を加えた。そのため、「問題」の合計数が、各項の合計数とは異なる場合がある。

問題数の多い順から「実験・研究の結果・成果」(87個)、「実験・研究の経過・方法」(64個)、「人物に関する記述」(23個)となっている。3-1-3で述べたように、本文理解の上で重要なテーマは「実験・研究の結果・成果」である。そして戸田は、そこから「問題」を多く抽出している。「飛行機の発明」を読む上で、「実験・研究の結果・成果」が必要であり、「実験・研究の経過・方法」「人物に関する記述」はそれほど必要でないと戸田は位置づけているのではないか、という我々の仮説は「語」の分析だけでなく、「問題」の分析を通して当てはまることとなった。

このように、「問題」とテーマとの関係を分析していくと、「語」の場合と同様、重要なテーマである「実験・研究の結果・成果」から多くの「問題」が抽出されていることがわかった。

3-3 「記憶問題」に関する考察—「書くこと」への応用—

戸田によると、「記憶問題」の目的は、「純然たる形式的記憶力の涵養に重点を置いた」²⁸としていた。しかし我々は、その「問題数の多さや問題種類の豊富さ」、「教科書ガイドに扱われていないこと」などという理由から、さらに深い意義があるのではないかと考えた。そこで我々は、「記憶問題」に着目した。「飛行機の発明」の「記憶問題」に関して分析考察を加えた。以下が「飛行機の発明」における「記憶問題」の配列である。

一、次の文を解釈せよ。	七、次の語の反対語を書け。
二、I 次の片仮名を漢字に直せ。 II 次の文中の仮名を漢字になほせ。	八、次の語を用いて短文を作れ。
三、次の言葉のわけを言へ。	九、左の語の正しいのに○を附せ。
四、次の語に読仮名を附しわけを書け。	十、次の二つの文の違いを言へ。
五、I 次の字を用いて、二つづつの熟語を作れ。 II 次の字の上と下とに字をつけて二つの熟語とせよ。	十一、左の文中の□に仮名を入れよ。
六、次の語の類語を書け。	

すると、まず初めに「文の解釈」問題があり、続いて、「漢字」や「語」という小さい単位から始まり、熟語、類語、反対語、と至り最後は「短文作成」や「正誤問題」で終わる配列になっていることが分かった。「記憶問題」の配列を整理したものを以下に示す。なお、番号は「記憶問題」の問題番号である。

「①模範文」→「②漢字」→「③言葉の意味」→「④語の読み仮名・意味」→「⑤熟語作成」→「⑥類語」→「⑦反対語」→「⑧短文作成」→「⑨語の正誤」→「⑩文の正誤」→「⑪文の穴埋め」

「記憶問題」を順番に解いていくと、最終的に模範文のような文章を書ける配列になっている。ここに「読み」から「書き」へ応用できるような配列の工夫がされていると考えられる。初めに正しい文章の見本があり、漢字→語句→熟語→短文作成といったように、小単位の漢字から徐々に範囲が広がる配列である。「記憶問題1」から順を追って説明していく。

まずは、「記憶問題1」で、教材から文章を引用し、「文の解釈問題」を設定している。我々は、「記憶問題1」を「模範文」として位置付けているのではないかと考えた。その理由として戸田の「文段の研究について」の中に「我々はこの模範文を基礎とし、之に類似した作文は自由に書けるところまで進まねばならない²⁹」という記述があり、最終的に子ども自身が模範文のように書くことを目標にしていると考えられるからである。模範文のように書くためには、初めに模範文を置く必要がある。

「記憶問題2」には「漢字」問題が設定されている。文章を書くにあたっての最小単体が「語」であり、その中でも「漢字」が書けることを基本だと位置付けていると考えられる。

「記憶問題3」では「言葉の意味」を問うている。漢字練習において単語を書けるようになった後、「言葉の意味」を知ることを問題として置いた。単語から広がり、書くにあたって言葉の意味を知り、文章で適切に言葉を使えるように工夫されていると考えられる。

「記憶問題4」は「語の読み仮名と意味」を問う問題である。語レベルで読みとその意味を捉え、文章を書くにあたって的確にその語を使えるようにと意味を押さえていると考えられる。

「記憶問題5」は「熟語作成」問題である。語から広がり、熟語を書かせる問題に発展している。漢字の組み合わせを意識させており、漢字を覚えた後に熟語を書かせるという合理的な配置となっている。

「記憶問題6」「記憶問題7」では「類語」「反対語」の問題が置かれている。「記憶問題5」で熟語を理解させた後に、熟語の類語と反対語を問うている。『指導読方』は同じ「語」に関する問題でも、「言葉の意味」→「熟語」→「類語」「反対語」という順番で、多様な問題が配置されているのである。そしてそれらを、一括りに「語の問題」としてしまうのではなく、一つ一つを区切っているのである。これは、「語法」や「形式探求」といった項目との相互関連を図っているものと考えられる。学習者が「問題」を解くことによって自分のつまずきに気づき、その「問題」に準じた項目の解説をもう一度勉強できるような問題形式になっている。

「記憶問題8」においては「短文作成」を行っている。ここまで、文章を書くためのパーツ（語や熟語など）を理解させた後、それらを活用しながら、短文作成に取り組ませる。ここが「記憶問題の山場」と考えられる。戸田が目指す、文章理解から書くことにつなげるということがここで完成している。「短文を書く」という作業は、戸田が「記憶問題」においた主目的「純然たる形式的記憶力の涵養」³⁰の域を超える、知的に高等な作業である。この「記憶問題8」ができるように、「記憶問題1-7」は配列されていると考えられる。

「記憶問題9」「記憶問題10」では「語の正誤」問題、「文の正誤」問題を置いている。「記憶問題8」で短文を自ら書くことを求められた学習者は、ここに来て「語や文章の一種の評価」を求められることになる。これは一種の、文を書くにあたっての応用問題であると考えられる。「記憶問題8」で短文が書けるようになったら、正しく使われている語や文を評価させていく応用問題を、子どもに解かせるのである。

「記憶問題11」で「文の穴埋め」問題である。「記憶問題9」「記憶問題10」では正誤を評価させていたが、「記憶問題11」では自分で考えて語の穴埋めをさせている。これは、より高度な問題となっている。

このように見ると、「記憶問題」の配列は、易しい問題から難しい問題への段階的な配列という「難易度の段階性」であるとも、もちろん考えられるが、「書くこと」へ応用させるための「書くための段階性」であるとも考えられる。つまり、「記憶問題」を順番に解いていけば、子どもは自然と正しい文章を書くことができるような配列になっているとも考えられるのである。「序」で主張していた「綴り方に応用」³¹することは、「記憶問題」のこのような配列からも見て取ることができる。

3-4 分析のまとめ

以上、「飛行機の発明」を『指導読方』で「語法」や「形式探求」などで取り上げられている「語」や、「問題」とを照らし合わせて分析してきた。そして、戸田が必要であると考えたであろうテーマから多くの「語」や「問題」を抽出していることがわかった。また、特に「語」は必要なテーマからだけでなく、重要人物であるライト兄弟に関する記述からも多く抽出されていた。ここに、戸田の教材の分析手法を見出すことができる。つまり、戸田は学習者に、万遍なくすべての単語や文章に着目させたいのではなく、軽重をつけて読ませようとしているのである。戸田は、文章構造をつかんだのち、文章全体を理解するうえで読む（理解する）「必要がある」文（部分）、それほど読む（理解する）「必要がない」文（部分）を見分け、前者をしっかりと理解できるように『指導読方』を編集・執筆したと推測できる。そしてなおかつ、戸田はその文章構造の中で「重要な部分」から「語法」や「形式探求」で取り上げる「語」を抽出し、「文章構造（全体）と語（要素）」の二つを絡めた文章理解を目指したのではないだろうか。

このように、文章を「必要か、必要でないか」の軽重をつけて読み、『指導読方』での扱いにも「軽重」をつけていた戸田による教材の分析手法は、現在の学校教育での授業を行う際の教材研究にも活用できると考えられる。(1-3-2参照)

また3-3で詳しく分析したように、「問題」の配列にまで戸田は気を配っており、その目的は学習者が「書くこと」ができるようになることであった。「文章構造（全体と語（要素）」の二つを絡めた文章理解を目指し、最終的には学習者が自ら「書くこと」ができるようになることを目的としていた。この「書くこと」を最大の目的とすることは、「序」や「自序」に明記されているように、戸田の「国語教育」に関する信念だと考えられる。

4 『指導読方』における「国語の力」（小学国語読本5年前期）の解説の分析

4-1 「国語の力」（小学国語読本5年前期）での分析手法の検証

川島の研究や、我々の「飛行機の発明」の分析により、「語法」や「形式探求」などの「語」に関する項目や「問題」の項目は本文理解において重要な箇所から抽出されていることがわかった。そこで、我々は、同じ説明的文章教材である「国語の力」（小学国語読本5年前期）の解説においてもその法則が当てはまるのか、検証を試みた（本文は資料3を参照）。具体的には、「飛行機の発明」の分析とは手順を逆にした。すなわち、「語法」と「形式探求」や「問題」が文章のどの箇所にとどのくらいの数が抽出されているのかを先に見ていった。そして、「語法」と「形式探求」や「問題」が多く抽出されている本文の箇所は実際に文章構造上、文章理解上重要だと言えるのかを検証した。

4-2 「語法」「形式探求」の数の分析から導き出す「必要な段」

まず、「国語の力」で取り上げられている「語法」と「形式探求」を列挙していく。「語法」は「中・いただき・今日・あづかる・」が挙げられている。「形式探求」においては、「類語」が「言葉・大切な・まことに・外国・心地・子供・教育・以来・現在・一身・国民」が挙げられており、「反対語」は「さざれ・栄・地獄・子供・精神・現在」が挙げられている。そして、「語法」「形式探求」の数を調べ、段落ごとに集計をした。以下がその表である。

表を見てもわかるように、第4、5段に多くの「語法」「形式探求」があり（前項までの我々の分析とそこから導き出した結論が正しけれ

表6 段落と「語法」,「形式探求」の関係

段落	語法	類語	反対語
第1段	0	1	0
第2段	0	0	2
第3段	0	2	0
第4段	1	6	2
第5段	4	6	2
第6段	0	3	0
第7段	0	1	0

ば)、「必要な段落」と見なしていることがわかった。特に第5段は「語法」「形式探求」ともにその数の多さが顕著であり、最も重要視していると思われた。それとは反対に、第1, 2, 3, 6, 7段は「語法」や「形式探求」が少なく「あまり必要でない段落」と見なしていることがわかった。

それでは、本当に、戸田は第4, 5段を「必要な段落」とみなしていたと言えるのか。その証拠は、「文段研究」(「語法」や「形式探求」といったものと並ぶ解説の項目の一つ。詳しくは表1を参照)にあった。「文段研究」を見てみると、第5段の文段研究での説明は「国語の力」となっており、題名と同じである。そして、第4段は第5段を述べるのに繋げるための「問題提起」のような位置づけであった。第4, 5段の内容は、文章全体の中で、筆者が最も言いたいことが詰まっている部分であった。第4, 5段を読めば、「国語の力」がわかり、文章全体を読んだことと同じになる、とさえ言えるような内容である。

文章の内容と絡めてそのことを詳しく説明する。本文は、二種類の「国語の力」を述べていると考えられる。一つめが、第3段までに説明されているような、我々が「毎日話したり、聞いたり、読んだり、書いたりする」のが国語で、我々がその国語を使って話したり、考えたり物事を学んだりすることによって「日本人」として成長している、という力である。このように第3段までは、一般的な言語の機能としての「国語の力」が書かれている。しかし、第4段冒頭で、「此のやうに大切な国語であるのに、とすれば国語の恩をわきまへず、中には国語といふことさへも考へない人があゝる。」と問題提起し、論調が一気に変わる。そして、第5段で「万世一系の天皇をいただく我が国において、「我が国語もまた、国初以来継続して現在に及んでゐる」として、「国民を結びつける国語の力」が主張されている。これこそが、二つめの「国語の力」であり、この教材文の筆者が主張したい、「真の国語の力」である。「天皇」の話題に触れるところなど、いかにも昭和10年代の教材らしいが、文章の中心的な箇所であると言えるだろう。

そして戸田は、学習者にとって第5段の「国民を結びつける国語の力」及び第4段の「問題提起」を読むことが「必要」だと捉えていた、と考えられる。このことは、川島の研究および我々の「飛行機の発明」の分析から、「語」が文章構造の重要な箇所(と戸田がみなしていたと推測される)から抽出されているのではないかと仮説を立てることができていた。(4-1より)そしてここで、「文章構造の重要な箇所から語が抽出されている」という川島や我々の仮説が検証されたものと考えられる。つまり、文章構造と語を絡めて解説しているという『指導読方』の特徴が、裏付けられたと考える。

4-3 「問題」の分析

4-3-1 「問題」と文章構造との関わり

次に、「問題」の数から辿っていき、戸田が考えているだろう「必要」な段落を導き出していく。「語法」や「形式探求」から辿っていった場合、第4、5段が、戸田が重要だと位置づけている段落であることが前項で確認できた。「問題」の場合はどうなのか、以下の表に分類したものを示す。なお、「内容推理問題」を「推理」、「記憶問題」を「記憶」と表記している。また、「問題」の数の計算は、「飛行機の発明」の場合と同様、「問題」に該当する箇所が段をまたいで重複しても、どちらにもカウントした。そのため以下の表において、合計の数が4-3-1と異なる。

表7 段落と問題の関係

	第1段	第2段	第3段	第4段	第5段	第6段	第7段
推理	1	0	3	6	5	0	0
記憶1	0	2	0	1	2	0	0
記憶2	0	1	0	1	4	0	0
記憶3	1	0	0	1	2	0	0
記憶4	2	4	1	1	6	0	1
記憶5	0	1	0	2	2	0	0
合計	4	8	4	12	23	0	1

「語法」や「形式探求」から辿っていった場合と同様、第4段から12個、第5段から23個と、多くの問題が抽出されている。これまでの考察（4-2-3参照）の結果からみて、戸田は第4、5段を「必要な段落」と見なしていると考えられる。反対に第1、2、3、6、7段には「問題」数が少なく、「あまり必要でない段落」と見なしていると考えられる。そして、4-2において、確かに第4、5段が文章の中で重要な箇所であることが確かめられていたため、「問題」数から辿っていても、「語法」や「形式探求」の場合と同様の結果を得たことになる。つまり、文章構造の重要な箇所から「問題」も抽出されているという我々の仮説が検証できたものと考えられる。

4-3-2 「記憶問題」に関する考察—「書くこと」への応用—

「飛行機の発明」同様、「国語の力」でも、「書くこと」への応用は「記憶問題」の配列に反映されている。以下、「記憶問題」の問題文を示していく。

一、次の文を解釈せよ。	四、次の片仮名を漢字になほせ。
二、左の語のわけを書け。	五、左の語を用いて短文をつくれ。
三、次の句を解釈せよ。	

「文の解釈」問題が初めにあり、最後は「短文作成」問題で締めくくっている。問題内容は違うものの、問題の配列の流れは「飛行機の発明」に類似している。以下に、「記憶問題」を配列に着目し、整理した表を示す。なお、数字は問題番号を表している。

「①模範文」→「②語の意味」→「③句の解釈」→「④漢字」→「⑤短文作成」

「記憶問題1」は「文の解釈問題」を設定している。「飛行機の発明」同様、初めに模範文として「文の解釈問題」を設定していると考えられる。

「記憶問題2」に「語の意味」、 「記憶問題3」に「句の意味」、 「記憶問題4」に「漢字」問題を置いている。「飛行機の発明」では「漢字」→「言葉の意味」という順番であったが、「国語の力」では「言葉の意味」→「句の意味」→「漢字」という順番になっている。「国語の力」に「句の意味」が加わり、「漢字」と「言葉の意味」の順番が入れ替わっている。

「記憶問題5」には「短文作成」問題を置いている。ここまでの漢字や言葉の意味、句の意味を理解した上で、短文を書かせる設定になっている。

多少問題の配列順の違いがあるものの、「飛行機の発明」と同じように、「記憶問題」の配列は、文章を書くためのパーツ（語や漢字など）を理解し、そして、模範文のような文章が書けるような配列になっているといえる。

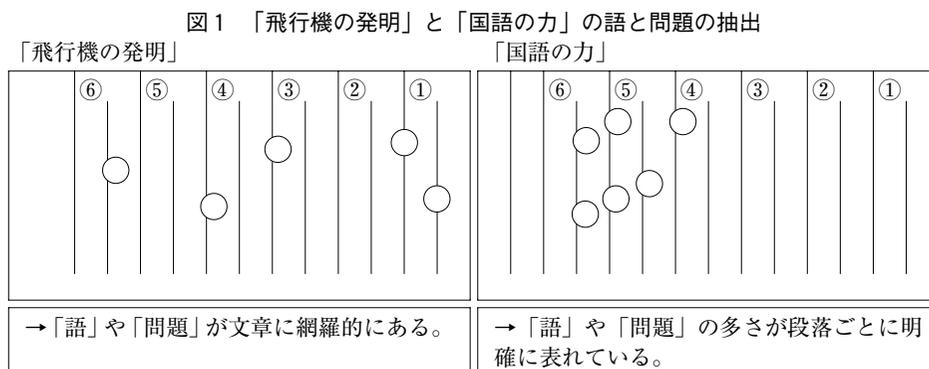
このように、「国語の力」における「記憶問題」の配列の段階性も「飛行機の発明」の場合と同様、易しい問題から難しい問題への「難易度の段階性」とも考えられるが、最終的には「書くこと」へ応用させるための「書くための段階性」とも考えられるのである。

4-4 「国語の力」の分析のまとめ

「語法」や「形式探求」などの「語」に関する事項であっても「問題」に関する事項であっても、それが多く抽出されている部分を辿っていくと、戸田が必要だと考える部分に辿りついた。「飛行機の発明」で導き出した説を、演繹的に「国語の力」に当てはめて検証をしても「飛行機の発明」と同じ結果を導き出すことができたといえる。この検証から、どの教材でも、戸田が必要だとみなしている箇所から「語」や「問題」が多く抽出されている可能性が高いと言えるだろう。

また、「国語の力」では「飛行機の発明」のようにテーマごとではなく、段落ごとに「語」と「問題」の偏りが見られた（下図参照）。これは教材の特性によって「必要か、必要でないか」の軽重のつけ方が違うことを意味している。「飛行機の発明」は網羅的な文章のため、段落ごとではなく、テーマごとに「語」「問題」の抽出の数で軽重がつけられている。しかし、「国語の力」の場合、筆者の主張が明確に示されている文章のため、段落ごとに軽重がつけられていると考えた。下図のように「飛行

機の発明」は「語」「問題」が網羅的にあり、「国語の力」は段落ごとにある（なお図の中の数字は段落，傍線は文章，○は「語」「問題」が抽出されていることを表している。文章の数や段落番号は実際のものとは異なる。）。



このことにより，教材の特性によって軽重のつけ方に差があることも確認できた。他の教材でも，その教材の特性を踏まえた軽重のつけ方があると推測できる。

5 本研究のまとめと今後の課題

5-1 まとめ

これまで「飛行機の発明」と「国語の力」の説明文教材を使い，戸田の教材の分析手法を探ってきた。本研究の分析により，その成果を4点にまとめることができる。

- ① 戸田は文章の全体構造を把握し，文章理解と作文法にとって「必要か，必要でないか」の様々な判断基準を持っていたであろう。
- ② 「軽重をつけて」，「語」「問題」を抽出し，『指導読方』を執筆・編集したのであろう。
- ③ ただ，教材の特性によって，それぞれに合った軽重のつけ方があるのだろう。
- ④ 「問題」を分析した結果，「記憶問題」は「書くこと」を意識した配列を工夫したのであろう。

戸田は，文章理解と作文法において「必要か，必要でないか」を判断し，解説に軽重をつけたと考えられる。そして，必要だと判断した箇所から多くの「語」や「問題」を抽出し，『指導読方』を執筆したのではないだろうか。この点に関しては，川島研究の結論が説明的文章でも成り立ち，より確証が高まったと言える。と考える。

また，2つの教材の分析手法を探っていくことによって，教材の特性に合わせて，「必要か，必要でないか」の軽重のつけ方は異なっていることがわかった。「飛行機

の発明」では「語」や「問題」が網羅的に全体から抽出されており、戸田はテーマ（内容）ごとに軽重をつけたのではないかと考えられる。一方、「国語の力」は明確に主張が表されており、段落に「語」や「問題」が集中していた。そのため「国語の力」において、戸田は段落ごとに軽重をつけたのではないかと考えられる。

さらに、「序」や「文段研究について」で述べている「書くこと」への応用は、「記憶問題」の配列に大きく反映されていることが伺える。戸田はこのことについて特に触れていないが、「記憶問題」の配列を見る限り、文章解釈から始まり、最終的には文を書かせるという所まで視野に入れた周到な問題配列であるといえるだろう。

5-2 今後の課題

今後の課題として以下の2点あげることができる。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 他次元での「必要か、必要でないか」という判断の可能性の探索。 ② 「創価教育学」との関連性を探るなどの歴史研究の不足。 |
|--|

今回特に焦点を当てた「必要か、必要でないか」のレベルは「一つの教材の中で」の必要な箇所と必要でない箇所、ということである。「必要か、必要でないか」のレベルは他の次元にも存在していると考えられる。例えば、「同学年で扱う教材」の中で、「必要な教材」や「必要でない教材」という次元である。これは『指導読方』での扱いの差に表れているように感じた。「語法」や「形式探求」の数が、全体的に少ない、つまりあまり解説がされていない教材も、散見されたのである。この次元での「必要か、必要でないか」は、本研究の対象としなかったが、「一つの教材」を軽重をつけて扱うだけでなく、「複数の教材」を、軽重をつけて扱っている可能性がある。この点に関しての研究は課題として残し、次の機会に譲ることとした。

課題の二つめは、今回の研究では『指導読方』の解説と教材の関連性という点での分析であったため、歴史研究に焦点を当てることができなかった。この点については、特に戸田の師である牧口の提唱した『創価教育学』との関連や、当時の一般的な国語教育と『指導読方』の比較研究などにより、戸田及び『指導読方』の真意や先見性はさらに明確になるであろう。今後さらに研究を深めていきたい。

注

- 1 川島清「解析論考 戸田城外著『推理式指導読方』」創価教育研究 2, 2003-03, pp.55-107
- 2 『指導読方』では、形式段落のことを「文段」と表記している。
- 3 戸田城外『推理式指導読方巻九』日本小学館, 1938, p. 1
- 4 3に同じ p. 1

- 5 3に同じ p. 4
- 6 朝日新聞 2012.10.24付朝刊
- 7 石丸憲一「読み書き関連から読み書き融合へ」長崎伸仁編『表現力を鍛える説明文の授業』明治図書 2008, pp.27-33
- 8 川島清「戸田城外著『推理式指導読方』解析」育英短期大学研究紀要 20, 2003, pp.25-41
- 9 1に同じ
- 10 川島は、「戸田城外著『推理式指導読方』解析」にて、「必要か、必要でないか」という判断が各項目に貫かれている「解説の方法」だとした上で、それを今まで国語参考書で成し遂げた者は一人もいない、と戸田の『指導読方』を称賛し、「驚異」と表現している。
- 11 長崎伸仁『新国語科の具体と展望』メディア工房ステラ 2010, pp.7-15
- 12 11に同じ p.14
- 13 11に同じ p.15
- 14 柴田義松・阿部昇・鶴田清司編『あたらしい国語科指導法 改訂版』学文社 2008, pp.55-56
- 15 長崎伸仁『説明的文章の読みの系統』素人社 1992, pp.85-97
- 16 3に同じ
- 17 「飛行機の発明」小学国語読本尋常科用第五学年前期用
- 18 「国語の力」小学国語読本尋常科用第五学年前期用
- 19 「アーチ橋の進歩」教育出版
- 20 本稿では、「教材の分析手法」という表記で統一し、「教材研究」とは区別して扱った。田近・井上によると「教材研究とは、教師が毎時間の授業に際して、あらかじめ扱う素材を研究し、学習者の発達段階、興味、関心に応じてその指導の過程をいかにするかを考える作業」をいう。（田近洵一・井上尚美編『国語教育用語辞典第四版』教育出版, 2009, pp.174, 175）戸田は教師としてではなく、参考書編集者として教材を分析しているので、厳密には「教材研究」という用語は適さないと考えた。
- 21 駒野晃司「戸田城外著『推理式指導算術』の研究のための序説」創価教育研究5, 2006, p.156
- 22 21に同じ p.156
- 23 今回、『推理式指導算術』の本文を分析し、『指導読方』と比較することまでは行うことができなかった。そのため、駒野の先行研究の結果を用いる形となった。
- 24 第九段の内容を詳しく見てみると、兄は理屈で考えることが得意で、弟は実際のものを作ることが得意だという、「ライト兄弟の性格や性質」のようなことが記述されている。このような人物の内面を描いたような記述は、リリエントールやラングレーの場合、本文中に一切見当たらない。一見すると、「飛行機の発明」に関係なさそうな記述だが、

語法などが多く抽出されている段であり、戸田は「必要である」と判断していたと思われる。それは、ライト兄弟の、理論（兄）と具体（弟）を結ぶ「相互補完的な」性質が彼らの成功に繋がったと、戸田が考えているからかもしれない。それを踏まえて文章を読み直すと、リリエントールには具体（実践）ばかりで理論が欠けていたとも読めるし、反対にラングレーは理論（模型飛行機）ばかりで具体的なものを作ることに欠けていたようにも読める。そこで我々は、授業においてこの第9段が「必要か、必要ではないか」という発問を子どもたちに行ってみてはどうか、と考えた。無くてもスムーズに文章を読めるが、そのように問うことによって、わざわざ「飛行機の発明」の筆者が第9段を書いた意図を思考することができるのではないか、と考えた。

25 戸田は「飛行機の発明」を「文段の研究」において一～五の意味段落に分けている。すなわち「一、日本の古い研究（第一段）」「二、ドイツ・リリエントールの研究（第二段）」「三、アメリカ・ラングレーの研究（第三段～第六段）」「四、ライト兄弟の研究（第七段～第十九段）」「五、今日の飛行界（第二十段）」である。

26 3に同じ p. 1

27 『教科書ガイド 小学国語 教育出版版 4年上下』新興出版 2011

28 3に同じ p. 3

29 3に同じ p. 4

30 3に同じ p. 1

31 3に同じ p. 1

謝辞

本論文執筆にあたり、『指導読方』等の資料収集に、創価大学創価教育研究所から多大なご支援を頂いた。この場を借りて感謝申し上げます。また、創価大学教職大学院・吉川成司教授には、多岐にわたる助言等を賜り、指導していただいた。心から感謝申し上げます。

A search for analyzing method of the explanatory teaching materials based on “SUIRISHIKI-SHIDOYOMIKATA”

Masahiro DOI, Hideki ARAI

“Suirishiki Shidoymikata” written by Jyogai Toda is a reference book for secondary school entrance exam in Japan of the 1930s. Kawashima (2003) analyzed the explanation of “Yoshino-yama”, which is literary text, of this book.

This study search for Toda’s analyzing method of the explanatory teaching materials, using following two points of Kawashima’s study for reference ; 1. Toda regarded words as important. 2. Toda used criterion that “essential” or not in order to understand materials. In short this study search for how did Toda analyze materials and what did he pay attention to through analyzing explanation and composition of this book.

As a result, we clarified Toda abstracted words and questions from structural “important parts” of materials and he aimed to interactive reading comprehension between the whole (sentences) and parts (words). Furthermore, we figured out Toda’s view of Japanese language education that teacher teaches living vocabulary and then they link to writing.